

日の丸ブリーダーを目指して

タキイ種苗株式会社 アメリカンタキイ
古市 浩之

私は2007年にタキイ種苗に入社し、2014年より米国カリフォルニア州にあるアメリカンタキイでペチュニアブリーダーとして勤務しています。大学院時代の思い出やタキイ入社後の経緯と共に米国の園芸情勢やペチュニア市場の現状を少し紹介させていただきます。アメリカ生活が長くなってきたため、乱文等目に付くかもしれませんがお許しください。

なお題名は、ある尊敬するブリーダーの言葉を引用させていただきました。

自己紹介

私は福島県矢祭町という中間山地の花農家の長男として生まれました。元々は野菜や蒔蒔栽培を生業にしていたのですが、私が小さい頃に花卉栽培に転向したため、物心ついたところから花に囲まれて育ちました。平成元年に花卉栽培に転向して一代で安定した花卉専業農家を築き、ポインセチア品評会では毎年の上位入賞、毎年高水準の単価で取引されるポットカーネーションを栽培する父を本当に尊敬しています。私は地元の高校を卒業後、東京農業大学に進学しましたが、サークル活動にアルバイトにと遊んでばかりの大学生活でした。当時は漠然と花に関係する会社で働きたいという思いで就職活動も行いましたが、社会に出て父に早く一人前と認めてもらうにはと考えた折、生産者の川上で仕事をするブリーダーになるのが手取り早いという思いからブリーダーを志し、大学院で一から勉強し直そうという思いで進学を決意しました。名だたるブリーダーの方々は、小さいころから育種に興味があった、自分で種を取って育てていたなど話を聞いたことがありますし、少なくとも植物に精通していた方が多いと思います。そのような素晴らしいバックグラウンドに比べるとなんと浅はかな理由でした。

千葉大入学の経緯と大学院生活の思い出

進学を決意したその日に千葉大学のホームページを検索したところ、なんと出願期限の3日前でした。しか

も出願するためには一度教授と面接をする必要があると書いてあります。即刻、園芸学部にも連絡をし、安藤先生に取り次いでもらい、翌々日に会っていただけることになりました。当時は「運命的なタイミング」と思っていました。安藤先生にお会いして、一言目の言葉が「Arabidopsisって知ってるか」という質問でした。無知さゆえに「ユリか何かですか」と咄嗟に返答したことは、今思い返しても顔から火の出る思いです。その時点で先生には、こいつは何も知らんかと烙印を押されたことをよく覚えています。それでもなんとか出願許可は得られ、その後は一から様々な教科書を読み漁ったおかげか、なんとか入学することが出来ました。

2005年当時の花卉研は安藤先生が教授、國分先生、渡辺先生が助教授の体制でした。一つ上の世代には松原さん（現・松原園芸）や平山さん（現・日種協）という優秀な先輩方、後輩達も物静かながらも野心を持っているような精悍な人達ばかりで、他大学から来た私は完全に浮いた存在でした。人数が多く、良くも悪くもいつも朗らかムードが漂っていた農大の花卉研とは異なり、千葉大の花卉研は少数精鋭で、笑顔の中にも何か殺伐とした空気が流れ、常に緊張感がある雰囲気でした。勿論そのような空気を作り出していたのは、当時赤いエスティマに乗っていた人物です。その方に怒られた数々の伝説や毎年必ず怒られ役が設定されることは皆さんご存知だと思いますが、見た目が生意気なせいか多分に漏れず私も怒られ役だったので、常にその方の目に入らないように生活していました。ペチュニア野生種の管理など懸命に作業し、休憩時間にただ煙草を吸っていただけで怒鳴られたことなど、不可解に怒られたことは数えきれません。そんな学生生活のストレスからか大学院の2年間で体重は30キロも増加し、0.1トンにまで達していました。ラーメン激戦区になる走りの時期だった松戸で、週8回ほどラーメン屋に通っていたこととは無関係だったと信じています。



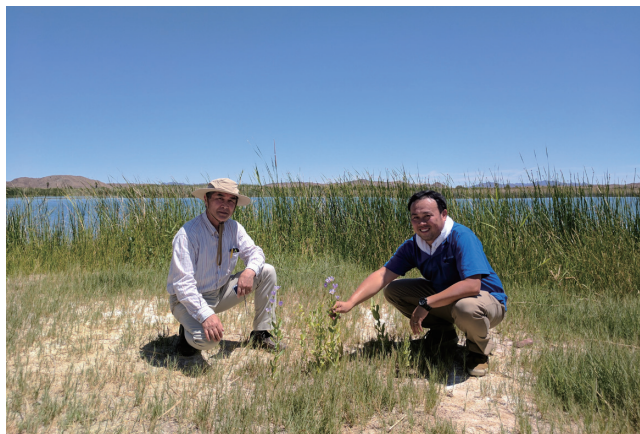
右側が筆者

当時の花卉研の研究作物はペチュニア、カリブラコアが主体で、アントシアニン合成系の DNA 分析や色素分析が主な研究テーマでした。出願面接時に自分の馬鹿さを露呈した手前、頭よりも体力勝負と決め込んでいた私は「ペチュニア野生種の昼夜開閉運動」に関して研究することに決めました。今思えば、これが人生を左右するターニングポイントだったと思います。まず、どの野生種が開閉運動をするのかを調べるために全野生種を対象に観察する必要があり、昼 12 時と夜 12 時に全野生種の花径を調査しました。その流れから野生種温室の栽培を担当することになり、2 年間ペチュニア全野生種を朝から晩までじっくり観察できたことは非常に貴重な経験でした。学生時代にペチュニアを研究し、就職後もペチュニア育成に携われることは恵まれていますし、何よりもペチュニア全野生種の特性を良く知ったうえで、育成に携われることは強みになっています。

タキイ入社

～千葉大での実学・1000 属検定のありがたみ～

「軍隊並みに厳しい職場」とは、昔からタキイを形容する際に使われている言葉です。新入社員時代はひたすら農業の基礎を叩き込まれます。白長靴を履きながら移動は常にダッシュ、スコップを担ごうが、肥料を担ごうが関係ありません。機械が壊れた時でも圃場作業ができるようにという目的から畝立ては全て人海戦術、ハウス建設も全て自前などとても効率的とは言えない面もありますが、将来就農する園芸専門学校の生徒達と共に厳しくも明るい雰囲気で作業を行ったことは良い経験です。そんなハードな生活のお陰もあり 1 年で 30 キロのダイエットにも成功しました。知識、経験を得ながらダイエットも出来るという話は、就職説明会の先輩社員インタビューでの私の鉄板ネタになりました。



ユーストマ自生地にて羽毛田氏と共に

「水やり 3 年」という言葉があるように、花卉グループでは入社 3 年目まで週替わりで灌水業務を担当し、各育成品目の栽培を叩き込みます。先輩社員に教わらずとも基本的な事は身に付いていたので、千葉大での実学的な面がすぐに役立ちました。また入社後は花卉研の大先輩でもある羽毛田次長（当時）に指導いただきながらペチュニアやカンナ、観賞用トウガラシ等の育成を担当すると共に、当時タキイが買収したある会社の遺伝資源の栽培、検定も担当しました。ここで役立ったのが 1000 属検定です。B 級程度の知識ですが、先輩ブリーダーを含めても植物を知っている方だと認めていただけたことで、花卉グループでは扱ったことのなかった様々な品目を栽培しました。またその経験から、当時育種を行っていなかった様々なマイナー品目の育成にも挑戦することが出来ました。そのほとんどが既に羽毛田次長が挑戦したことのある品目ばかりでしたが、僅かな可能性を信じて挑戦させてもらえたことは良い経験になっています。

米国の花卉生産の動向

米国の園芸事情に関して少し紹介します。2018 年の USDA（米国農務省）の調査によると、米国の花卉園芸生産農家は約 6400 軒で、栽培面積は約 8000 ヘクタールです。卸売時での市場規模は約 5000 億円になり、カリフォルニア州、フロリダ州、ミシガン州の順で大きな生産地になっています。また上位 100 位の農家が総面積の 26 パーセントを占め、米国 1 位の Altman Plants（カリフォルニア）の栽培面積は 240 ヘクタール、2 位の Costa Farm（フロリダ）で 140 ヘクタールにもなります（2020 年 Greenhouse Grower 誌）。また花卉生産から大麻生産に切り替える農家が増加していたのも近年の動向でした。しかし今年はコロナ禍の影響が大き

く、特に切り花農家に甚大な影響を及ぼしており、作付けを止めてしまった農家も少なくありません。

ペチュニア生産に関して見てみると、下記販売規格における上位 5 州の栽培数は下記の通りです（2018 年 USDA）。

米国でのペチュニアを含む花壇苗の販売規格は日本とは異なり、日本で主流の 9cm～10.5cmポットのような規格はあまり見かけません。また規格によって使われる品種も異なります。ペチュニアでは下記のように大別されます。

・6 連結カットパック：安価な種子系立性品種使用。大輪品種主流。

・クオートポット（4 号ポット相当）：種子系、栄養系共に匍匐性品種主体。

・1 ガロンポットやハンギングバスケット等の大鉢：種子系、栄養系共に匍匐性品種主体。他色との混植や多品目との寄せ植えも多い。

また好みも日本とは大きく異なり、日本で主流の小輪でコンパクト多分枝のような品種はこちらでは好まれず、花径は中大輪から大輪サイズでビビットなカラー、特に国旗の色である赤、青、白が最も重要な花色です。また近年は栄養系ペチュニア市場が拡大しており、種子系では出せないユニークな花色が数多く発表されていることも人気の一因です。

1 インチ = 2.54cm	5 インチ鉢以下 (カットパック含まず)	5 インチ鉢以上	ハンギングバスケット
ミシガン州	293 万	166 万	150 万
ノースカロライナ州	116 万	345 万	53 万
カリフォルニア州	250 万	107 万	35 万
フロリダ州	266 万	30 万	17 万
バージニア州	88 万	83 万	22 万

尊敬するペチュニアブリーダー + 1

タキイはペチュニア育種において後発の会社です。日本国内では種子系（ディーバ、ラテリーナ）、栄養系（ギュギュ、ドレスアップ）、海外では種子系品種を主に販売していますが、花壇苗品目の中でも最も熾烈な競争品目の一つであるペチュニアで市場シェアを伸ばすことは容易なことではありません。そのような中で、現在も世界を席巻している匍匐性ペチュニア品種を開発された偉大な日の丸ブリーダーがおられます。超有名な方なので説明する必要もありませんが、このレジェンドブリーダーを凌駕するような品種を作らなければ世界一のペチュニアブリーダーにはなりません。

・竹下大学氏

種子系匍匐性ペチュニアのリーディングバラエティであり、世界で最も認知度の高いペチュニア品種である「Wave」を作出した方で、初代 AAS ブリーダーズカップも受賞された偉大なブリーダーです。オリジナルの「Wave」シリーズから現在は「Easy Wave」や「Shock Wave」など派生したシリーズも多く出ており、また米国ナンバーワンのブローカーである Ball 社の販売力、マーケティング力も合わさって、まさに強大な難攻不落の

敵です。一度だけ酒席の場でお話させていただく機会がありましたが、ユーモアに富んだ話の中にも博学で育種を愛していることが伝わってきて素敵な方だと感じました。先日出版された「日本の品種はすごい」でも育種への熱い気持ちが伝わってきます。また一番バーバンクの名前を広めている日本人の一人だとも思います。また機会があれば話をうかがってみたいです。

・羽毛田智明氏

自社のブリーダーを入れるのはどうかと思いましたが、私の育種の師です。切り花用ヒマワリ「サンリッチ」や種子系カンナ「トロピカル」や「サウスパシフィック」など“世界初”や“AAS 受賞”、“FS（フロロセレクト）受賞”など冠詞を持つ数多くのインパクトのある品種を育成した方です。「野菜のタキイ」と言われるようにタキイは元来野菜の会社で、花の品種開発では後発の会社です。羽毛田氏からは「他社と同じようなレベルの品種を作っているのはタキイでは売れない。生産者やお客さんがパッと見てわかるような違いのある品種を生み出さないと生き残れない」と常にタキイでブリーダーとして仕事をする心構えを教えてくださいました。次長職を退任された後、長野県にある富士見農場に転勤しましたが、

育種現場に復帰できることを楽しみに話をされている姿を見ると、本当に一生涯ブリーダーなんだなぁと実感しました。

日の丸ブリーダーを目指して

入社式の後に開かれた新入社員歓迎会にて、酔った勢いで「社長、絶対に AAS 取りますからね」と勝手にステージに登壇し宣言したことは、企業育種というものをほとんど理解していなかった若気の至りから出た発言だったと思います。本格的に品種開発を始めて 10 年程度経ち、幸いなことに、これまでペチュニア 1 点、観賞用トウガラシ 1 点の AAS 受賞品種に携わることが出来ました。「商業育種とは駅伝のようなものだ」とある尊敬するブリーダーの方がおっしゃっていましたが、今でこそその言葉を理解できるようになりました。先輩社員の方々が紡いできた素材を元に現在の育成が成り立っており、偶々私のタイミングで品種化することが出来ただけで先人の方々の努力があってこそその結果だと感じています。現在アメリカに来て 7 年、やっと自分が最初から仕込んだ品種を作出できるタイミングになってきました。

企業人としては、会社に恩返しができるような利益性の高い品種を作出すると共に企業育種の一端を担った者として後輩ブリーダーのためにも先を見据えた育成を行っていきたいと思います。個人としては、AAS にチャレンジ出来るような新規性のある新品種を開発する気持ちは常に持ち続けていきたいですし、世界一のペチュニアブリーダーになる夢は諦めずに挑戦し続けます。



生産者での試作ガーデン



大学でのトライアル

本日郵送された、あるナーサリーのカタログの裏表紙に、2018 年のチェルシーフラワーショーで最高賞を受賞したアジサイの北米での販売開始を伝える記事が坂寄潮氏の写真と共に紹介されていました。いつか自分もこのような世界に誇れる日の丸ブリーダーの一員になることを目標にこれからも情熱を持って取り組んでいきます。また、花のブリーダーを目指す後輩達が続いてくれることを期待しています。



ブルームーン&（仮）ラテリーナレモン



オニクスレッド